

蓬萊尚賢と雅俗

鈴木, 淳

<https://doi.org/10.15017/4755935>

出版情報 : 雅俗. 1, pp.26-28, 1994-02-28. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



しかし、三国のようにまとまった形で遊女俳人の存在を示す例は多いものではない。三国の代表的地方遊里の性格として注目に値するものである。哥川が登場する文芸の土壌を、三国は十分に有していたのである。鄙には稀な「雅」の精神の開花といってもよいであろう。

◇

天明四年（一七八四）頃、三国職人によって作られた遊女の打ち掛けを見た。三国の遊廓福島屋の太夫お殿が着用したものであるという。二匹の竜が跳ねている。金銀の刺繍、牙には象牙、目にはギヤマンである。三国職

人の自負が伝わるようであった。そして、打ち掛けに哥川の像が重なった。

冒頭にあげた一句を哥川が詠じた場所は、遊廓のあった出村であろう。今、その場所と九頭竜川との間は埋め立てられて、海までの距離は少し遠くなったが、哥川の時代、軒先はすぐに海であった。座敷の真下から冬の海の音が聞こえたのである。如何に「雅」に飾られようとも、身を翫ぎ、「うき世の人の煩惱」に汚れた「俗」な遊女である。彼女は、奥底の知れぬ海底に「雅俗」織りなす人の世の果てを見ていたのである。

蓬萊尚賢と雅俗

《特集 雅俗の諸相》

鈴木 淳

賀茂真淵は、書簡などにもさかんに雅事、俗事を口にしたが、その影響であろう、真淵の周辺の人々の書簡を

見ると、ことさら雅俗を言立てることが少くない。その一例として、蓬萊尚賢の場合を取上げてみたい。尚賢は、

伊勢内宮の権祢宜で、荒木田氏、通称雅楽、琢斎などと号した。伊勢津の谷川士清の門に入り、その女婿となるが、出府の機縁を得ては真淵の許を訪れ、大いに学問的刺激を受ける。また師士清の没後は、本居宣長に親接し、内宮における鈴屋社の魁となる。その尚賢が安芸竹原の柄崎士愛に宛てた書簡一通が、同所の磯宮八幡神社に現存する。宛所の士愛は、磯宮八幡神社主で常陸介と称し、赤斎と号した。尚賢同様、士清に親炙すると共に、忠孝の義を唱えて諸方を歴遊、高山正之や尾関正義らの皇国主義者と氣脈を通じたが、その奇矯な言動は、同郷の頼春水によって「狂之狂」と貶められ、寛政八年、先祖の墓前で凄絶な割腹自殺を遂げたことでも知られる。当該書簡は、宮司南疆氏の御好意により眼福を得たもので、未紹介と思われるので、左にその中心のくだりを引掲する。

(略) 殊ニ御近郷御歴経、御講授等被_レ成候旨、到而大慶此事にて、又々此辺御往来も無_二御坐_一候旨、扱々得_二寛暇_一度事ニ御坐候得共、千里之山海不_二自在_一候、去々年九月の伯府御評定所へ被_二召出_一、期月迄在留、

漸々去年九月帰宿仕候処、又々頃日御召状到来、中旬之頃、出足仕候、不_二存寄_一俗に被_レ纏候事に候、乍_レ然伯府在留中も、岡部ハ物故に候得共、楫取魚彦、羽倉東藏、南宮弥六郎、沢田文二郎、三井孫兵衛、菅楚勘平杯、懇意ニ就、毎々出会仕、雅事も不_レ少候而、不幸中之幸と奉存候、乍_レ然御存知之魯才甚而已之事にて候得共、近頃ニ至候得ハ、何となく山崎子之説等ニ疑惑生し申候、足下如何候哉、国学之訓詁不_二行届_一事計ニ候、八雲之歌、倭小学ニ清濁を被_レ論類ニ候、近頃古事記等吟味仕、早春今当地林崎書院ニ而講究取掛リ申候得ハ、自宅紛冗無_二其寸暇_一候而、心外罷過候

書簡の年紀は、尚賢が一昨九月より昨九月までの間、出府し、また本二月中旬にも出府の予定であると記すことを勘案して、安永元年と推定される。出府の理由は、内宮と下宮の間の長年にわたる係争の取調べであろうか。尚賢は、この要務について、「不_二存寄_一俗に被_レ纏候」と苦り切った筆致で述べるが、おそらく俠氣に富んだ尚賢のことであるから、自ら出府の労を買って出たことも

十分に考えられる。もとより尚賢は、神宮の実権を握っていた権称宜御師層の代表格でもあった。にもかかわらず、出府の任務を「俗」と言捨てたのは、それが神職という仕事から切離せないものであったからであろう。

反面、尚賢が雅事と称するのは、江戸の雅客らとの交際であり、それは俗用による出府がたまたま齎した僥倖であるかのような書振りであるが、元来、諸方に遊んで文人墨客の交わりをすることは、尚賢の好尚であり、江戸における雅交の一端は、三重県立図書館蔵の『亥丑録』によっても知ることができる。安永元年当時は、真淵が亡くなって間もないころであるが、その後継者である楳取魚彦や盟友の荷田在満、また傾儒南宮大湫に菅野綸斎、そして唐様書家として都下にいづれ劣らぬ盛名を競った沢田東江と三井親和等の名を挙げている。右のうち、比較的、名の通りの悪い菅野綸斎は、高山正之著『武江旅行記』（安永六年）の訪問先としても見えており、当時、細井平洲の嬰鳴館と並称された会輔堂の主人であった。さて、書簡の後半には、山崎闇斎の学問に対する不信感を募らせていることを洩らし、暗に同調を迫っている

が、このことは、安永五年五月廿九日付宣長宛書簡にも、「○先頃柄崎常陸介御尋申上候旨、此元に而も旧識之者故、寛々新古之論等仕候、乍然純垂加流ニ而復古之事大ニ誘引仕度候」とあるとおりである。かつては、真淵に「皇朝の学之執心有人ニハ有之候へ共、垂加とやらんか弟子ニ而、儒学を以て神道を論る人」（明和四年正月五日付、宣長宛真淵書簡）と評された尚賢であるが、この頃は、すっかり宗旨変えをしていたことになる。垂加神道は、厳肅な師弟関係の上に成立っており、その信奉者にとつては、闇斎に対する批判など、思いも寄らないことに違いない。加えて、垂加は、神事作法についての秘事口伝が多く、それだけ神職という仕事に密着した学問と言うべく、尚賢が世俗を離れた雅事云々を口にすることができるようになったのは、垂加の克服がその前提にあったごとくである。土愛が尚賢の言をいかに受止めたか、詳らかではないが、本書簡を秘蔵していたことから類推するに、胸に深く刻んでいたことだけは確かであろう。